クラブ今昔

「軟式野球部」――全国制覇四回の金字塔

日本のベースボール（野球）の伝来は、米国より明治初期の文明開化の時代に伝えられ、軟式野球の普及は明治の末頃、子供達の遊びとして「ゴムマリ野球」が盛んになり、軟式庭球ボールを使用し、グラブは使用せず素手で、バットは棒切れや、自分達で木を削った手製の物を使用し、大正期に入ると、学校の校庭や、空き地等で、三角ベースやら、適当に、ルールを作って遊んでいた。やがて、ゴムマリから中が空でなく、ボール全体がゴムのスポンジで作られた、スポンジボールが出現し、直球は元より、カーブ、ドロップの変化球も自在に投げられ、当時の野球少年達には評判も良く、「スポンジ野球」と呼んでいた。そして更に、改良が進み現在に近い規格ボールが誕生し、昭和三年に「軟式野球」の名称が正式に決定した。

本校軟式野球部の創設は終戦間もない昭和二十一年である。当時は小学校を卒業し本校に入学していた野球好きな学生達でつくる、いくつもの草野球チームが乱立し、その中の一チームで「UNION」が母体となって、最初は、同好会の様なスタイルで発足したが、野球道具も不足していた時代だった。すでに、昭和三年に創部していた、硬式野球部は、実績、人気共に、県内はもとより全国レベルに達しており、日頃の練習でも、グランドの占有率も高く、残ったグランドに、テニス、バレー、陸上、ハンドボール部等と軟式野球部が、ひしめき合って共有し、練習に汗を流していた。時には硬式野球部に対してジェラシーを感じる部員もいた様である。そんな創部五年目の二十六年に、広島で第六回国体が開催され本校軟式野球部は中部地区（現在の東海四県）代表として、全国大会に初出場し、大会には、顧問の根本行信教諭（後の本校十二代校長、故人）と監督として硬式野球部OBの松永彰教諭（昭和十六年、四十回卒）が同行し、一回戦で、いきなりこの大会で優勝した。近畿代表の京都商業と対戦し延長十回に京都商のスクイズが決まり、二対三で惜敗するが、二年生エースだった横山昌弘（二十八年、五十四回卒）は投打に活躍し、大会後、大学進学を志望している事を先輩でキャップテンの吉住敏（昭和二十七年、五十三回卒）に相談し「だったら硬式に転部する方が良かろう」とアドバイスされ、松永彰監督の推薦と、チームメイトに背中を押されて硬式に転部し、強肩と、打力を買われて翌二十七年春の選抜大会優勝時の外野手として活躍し、その後は、念願通り明大に進学し、社会人野球を経て、プロの中日に入団するという秘話があった。横山と同期だった野崎鏡二（昭和二十八年、五十四回卒）は、卒業後は自営業の傍ら二十八年より三十四年にかけて、本校監督として後輩選手育成に尽力し、後にOB会長として軟式野球部の礎を築いた一人である。

二十九年には、第九回国体が北海道で開催され二度目の出場で、上野駅より十五時間、夜汽車に揺られ、青森より青函連絡船「洞爺丸」で北海道に渡り、初戦、和歌山商業と対戦し、延長十三回日没引き分け、翌日再試合で九回に一点を取られ涙をのむが、連投したエースの塚本清次（昭和三十一年、五十七回卒）の力投が光った。大会一カ月後に、洞爺丸が台風で転覆する痛ましいニュースが伝えられた。二十年代は就職難の時代だったが、軟式野球部員の多くは、文武両道に優れ、地元大手優良企業への就職率が高かった事を前出の松永教諭をはじめ、多くのOB諸氏が口を揃えて当時を回顧する。

三十二年には、地元静岡での国体に於いて新宮高と対戦し、久保山拓と平岩時夫（昭和三十四年、六十回卒）の継投で延長十回、四対五で初戦敗退するが、翌三十四年夏の全国高校軟式優勝野球大会に初出場ながら、準々決勝で平安高に敗れたものの、秋の東京国体では四国代表の徳島工高との決勝戦では、延長十三回で〇対一で惜敗したが堂々の準優勝で軟式野球部、黄金期到来を告げた年でもあった。すでに高校軟式野球界の常連校に成長していた本校は三十五年夏の全国大会に二年連続出場し、秋の熊本国体で秋田商との決勝戦を行いエースの増田泰宏（昭和三十七年、六十三回卒）が完封し三対〇のスコアで初優勝し全国制覇を収め、主将の田島昌弘（昭和三十六年、六十二回卒）を先頭に市内パレードを行った。三十六年は全国大会三年連続出場し、秋田国体で平安高に〇対一で決勝で敗れ、残念ながら国体二連覇は成らなかったが、この大会の二回戦は、新田高校と対戦し、折りしも昭和天皇、皇后両陛下ご臨席の天覧試合であった。

三十八年夏の全国大会は優勝校平安に準決勝敗戦するが山口国体では、大原高に二対三の一点差で準優勝と勢いが止まらない。

三十九年夏の全国大会には決勝で慶応高と対戦したが〇対三で涙をのむが、この大会で中心的選手だった、松本俊司（旧姓外岡、昭和四十年、六十六回卒）は現OB会長として五百名を越す会員を束ねる重責にある。

四十二年夏の全国大会の決勝で黒沢尻工と対戦し〇対一の惜敗で優勝を逃がしたが、エース森川茂（昭和四十三年、六十九回卒）は二回戦の高崎商に対して、ノーヒットノーランを達成し、埼玉国体でも準決勝まで進んだ。

四十三年はビックニュースで軟式野球界が沸いた。第十三回全国軟式優勝野球大会の決勝戦で、西中国代表の下関商と対戦し、両チーム共に延長十八回まで得点なく、〇対〇のまま延長十八回引き分け優勝預かり（ドローンゲーム）が告げられ大会史上初の出来事だった。エースの高柳光得（昭和四十五年、七十一回卒）は、一日で準決勝九回、決勝十八回計二十七回を一人で完投し、その鉄腕振りは驚嘆の一言につき、プロのスカウトからも注目された。監督として指揮を取った片田正明（昭和三十三年、五十九回卒）は長年本校監督として多くの部員達に「静商軟式魂」を叩き込んだ良き指導者の一人であり、外野手でメンバーの一人だった古牧清孝（昭和四十五年、七十一回卒）は、事務局担当者として今も、情報収集に多忙な日々を送っている。秋の福井国体では両校ともに一回戦で敗退する。四十六年は、三年生二人に二年生四人、一年生三人の若いメンバーだったが全国大会では準決勝進出と和歌山国体では二回戦で敗退するが健闘した。

四十八年は全国大会準決勝進出、千葉国体一回戦敗退する。五十年は全国大会通算十回目の出場だったが三回戦で姿を消し、三重国体で秋田商に敗れるものの準優勝する。

翌五十一年の全国大会の決勝で六度目の優勝を達成した平安高に三対四で惜敗し準優勝するが、この年、軟式野球部員を含む「飲酒事件」が発覚し、秋の佐賀国体出場を辞退し一年間の対外試合禁止処分を受けた。

五十三年に夏の大会名が、全国高校軟式野球選手権大会と改名され、翌五十四年の第二十四回大会で、創部三十一年目にして延長十三回、能代高を四対二で破り初優勝し、日本一の栄冠を手にして永田雅久主将（昭和五十五年、八十一回卒）を先頭に、凱旋パレードし秋の宮崎国体に於いても優勝し二冠を達成し本校創立八十周年を盛り上げた。

五十五年夏の全国大会でも前年の勢いが止まらず、エース内野雅弘（昭和五十六年、八十二回卒）の力投で延長十一回、四対三で千葉商に競り勝ち、堂々の二連覇を果たし秋の栃木国体でも準優勝し、外野手として活躍した戸塚一仁（昭和五十六年、八十二回卒）は、卒業後高校教諭の道を志し平成元年より現在に至るまで、本校軟式野球部の指導者として、かつて、昭和期に築いてきた、多くの先輩達の伝統と実績の灯を消す事のない様に、自らが、切磋琢磨し、文武両道に優れる部員を育てるために日々、精進している。

五十七年の全国大会二回戦で、天理高に、二対三で惜敗して以来、東海四県大会の壁が厚く、なかなか突破する事が容易でなく、全国大会出場への切符が遠ざかるシーズンが続く中、平成九年に二十九年前の、下関商との延長十八回引き分け優勝預かりの試合の決着をつけようと両校の関係者の尽力で、草薙球場で開催された。当時の両校監督とチームメイトが集結し、牧野直隆日本高野連会長の始球式で開幕し、二十九年前に主審を務めた、萩村一美も茨城より駆け付けてジャッジを振るい、結果は静商が十二対六で勝利し、両チーム共に勝敗を越えた青春に一応の区切りをつけた。

十年代初期で前出の戸塚に指導を受け後にコーチとして補佐した望月嗣久（平成十一年、一〇〇回卒）が佐久間高のソフトテニス部監督として、杉山暢啓（平成十三年、一〇二回卒）も春野高で、硬式野球部監督として情熱を燃やし続け、やがて母校静商に恩返しの出来る日も、そんなに遠くではなかろう。

十五年に平成期で初の東海四県で優勝し、全国大会ベスト四に進出し、秋の地元、静岡国体に期待されたが、一回戦で敗退する。

十七年は全国大会ベスト八に、岡山国体で三位となり復活への兆しが見え始めたが、今年二十三年は、東海大会の準決勝で敗退という結果に終わってしまった。

国体を含めた全国大会出場三十二回、その内、全国制覇四回という偉業を成し得た諸先輩の後に続くよう現一、二年生の後輩達に、全国五〇〇校の頂点を目指す新たなる期待を託する訳であるが、三年間のクラブ活動を通し、苦しかった練習に耐え、ピンチを乗り越え、仲間を信じて全員野球で勝利した達成感と、敗戦でも、謙虚に反省する心構えが、君達の長い人生の指針として生かされる事を、多くの諸先輩、指導者達が願っている。

末筆ながら、今回の取材にあたり、OB会長の松本俊司をはじめ多くの皆様より資料提供に、ご協力頂き厚くお礼申し上げると共に、紙面の都合でご紹介できなかったOB諸氏には深くお詫び致します。

（文中敬称略　番記者藤田）

静岡新聞　（第三種郵便物認可）

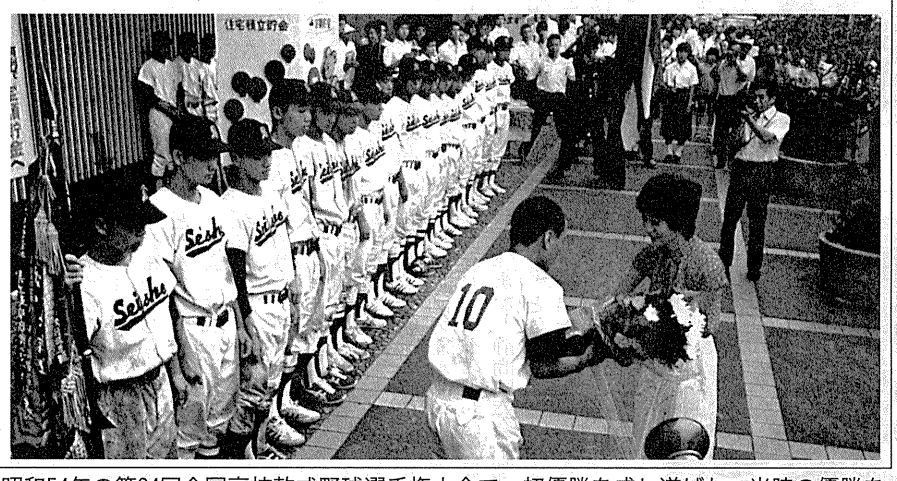
全国高校軟式野球

初優勝、おめでとう

静岡駅　盛大に静岡商ナイン歓迎会

第二十四回全国高校軟式野球選手権大会で初優勝した静岡商ナインが二十九日夜静岡駅に着いた。創部以来三十一年目の快挙に、野球部OBを含む先輩たち十人は静岡駅新幹線ホームで「バンザイ」の大合唱。丘田正明監督を先頭に、深紅の優勝旗を掲げた水田主将ら十八人は、改札口に出迎えた家族らの大歓声のアーチをくぐって、関係者五百人の待つ同駅広場の駅頭歓迎会に臨んだ。

すらりと並んだ選手たちは、歓喜のあまを示すように、真っ黒に日焼けしている太田課がひるがえるなかで、藤枝市長や市体育協会の花東が、自開を赤く染めた山口教育部長らに手渡された。同ブラスバンドが奏でる応援歌を聞いて、終い行は静岡市役所まで、隊服姿のいなかい鳴パレード。ことし創立八十周年を迎え、記念事業となった。



昭和54年の第24回全国高校軟式野球選手権大会で、初優勝を成し遂げた。当時の優勝を報じる静岡新聞。そのよく年も優勝に輝き、全国大会２連覇の偉業をなし遂げた。

昭和35年熊本国体で優勝を飾る。華々しく市中を優勝パレードをする選手達。上段先頭は、市原監督。下段優勝旗をもつのは、田島主将。

全日本女子相撲郡上大会
山中選手全国２連覇!!

静商同窓会副会長
第62回卒　相撲部OB
下村勝彦

第2回全日本女子相撲郡上大会が、八月二十三日(土)郡上市総合運動公園特設相撲場において、小学生から一般まで全国から一二〇名が参加し、開催された。初の団体戦に全静岡の中堅として出場したが、決勝で青森県に敗れ二位になるも、個人戦（中量級）では気持を切り替え奮闘し、持ち前のスピードに得意の投げ技が冴え、ライバルの岩本幸奈（日大）選手にも上手投で完勝、見事二年連続優勝を成し遂げた。

この大会で静岡県勢は、中学生軽量級をはじめ、一般軽量級、中量級、重量級、無差別級の五階級すべてを制覇する快挙となった。山中は無差別でも健闘し、世界女子重量級優勝の上田幸圭（日大、一二〇kg）を下手投げ破り（写真下）三位に入賞する。

昨年第一回大会のあと開催された第十五回全日本女子相撲選手権の中量級（65kg未）でも優勝したが、会場となった大阪堺市相撲場へは静商関西支部の富坂誠二幹事長はじめ、大阪近辺在住の同窓会の皆様が多数かけつけ、熱い声援をいただき、山中選手への大きな力となった。さらに十月十六日の

ポーランド、ワルシャワ市での世界女子相撲選手権に出場、中量級3位に入賞し、国際相撲連盟農大監督の安井氏からも、世界中量級は山中の時代が来るとの言葉をいただく。今回の優勝は十月二日の第十六回全日本女子相撲選手権大会（愛媛県西予市）での連続優勝へ向けて大きな弾みとなった。

（中量級（65kg未）決勝）
山中未久〇（下手投げ）
×兼平志織（青森）
（無差別3位決定戦）
山中未久〇（下手投げ）
×上田幸圭（日大）
（大会副審判長　県相撲連盟会長）